（城西人文研究第11号）

『我春集』の序文をめぐって

黄色瑞華

一

『我春集』（一茶自筆稿本・美濃判一冊、湯本氏蔵）は、文化八年（一茶四十九歳）の発句・連句・文章などによる。ただし、「鳥買の行や霜おく漂渺（澤標）太笻」を立句とする成美・乙因・浙江・一茶の五吟歌仙には、「文化三年十一月廿五日」とあって、これは後に混入したものであろう。

文化七年十二月二十一日、江戸を立った一茶は流山を経て、同月二十三日守谷の西林寺に入って越年している。同日中に「行としや空の青さに守谷迄」（『七番日記』文化七年十二月の条には、「廿三日西林寺ニ入／行としや空の名残を守谷迄」）の一茶の発句を立句とした鶴老・天外との三吟歌仙を興行している（我春集）。ひき続いて、同月二十三日以降、「走り行名なら形なら礒千鳥」（天外）、「草臥したねや時雨の筑ば山」（鶴老）を立句とした同じ連衆による三吟歌仙の成就もあった。また、歳晩には『我春集』の序を書き、「しなのゝ国乞食首領一茶書」と署名している。

西林寺で越年した一茶は、十三日に守谷を立ち、布施の渡し（現、千葉県柏市の内）を経て、流山に立ち寄り、同月十五日に夏日成美のもとへ帰っている。

この年の、一茶の動静を略記すれば次のごとくである。

一月　歳旦吟「我春も上々吉ぞ梅の花」

7　竹里の西林寺来訪をえて、「黄鳥の声をかぎりの枕哉」（竹里）を立句とした一茶・鶴老・天外による四吟歌仙を成就。なお、元旦からこの日までの間に、「ひよ鳥のひろふ（う）て行（ゆく）や梅花（うめのはな）」（鶴老）、「鶯や梅や無我には暮されず」（天外）を立句とした鶴老・天外・一茶の三吟歌仙二巻の成就もあった。

15　江戸帰着。

24　浅草瓦町より出火、成美（井筒屋）の支店焼失。同日に予定されていた一瓢をまじえての歌仙興行中止。

28　江戸滞在中の長月庵若翁を訪ねる。

29　本行寺（日暮里）に一瓢を訪ねる。

二月

11　江戸を立って、馬橋・流山・布川・佐原・小南・飯田を巡り、閏二月八日江戸帰着。

閏二月

12　成美の宅で若翁に会う。

13　成美と両吟歌仙（「花を折ル」の巻）成就。

29　江戸を立って、流山に入る。途中、隅田川で、将軍（家斉）御成りの天地丸を見て小文を作す。

三月

6　江戸帰着。

17　江戸を立って、流山・守谷・布川・馬橋に赴く。

四月

4　江戸帰着。

14　馬橋に入る。
18　江戸帰着。
24　馬橋に入る。

五月

3　流山を経て江戸帰着。
4　一瓢と両吟歌仙（「夕暮や」の巻）成就。
11　流山・布川・馬橋に赴く。
13　江戸帰着。
19　成美宅で、成美・太筋との三吟歌仙（「五月雨」の巻）はじまる、成就は二十二日（七番日記）。

六月

3　木更津に入る。
16　富津の大乗寺で、奥歯が折れたのを悲しむ文を作す。

七月

29　江戸帰着。その間、木更津・富津・金谷に遊ぶ。

八月

6　馬橋に入り、一泊して流山に向う。
12　江戸帰着。（『成美連句録』に、「文化八年八月十日」と記す「夕雲や不二もうごけと鳴子哉」（成美）を立句とした成美・諫圃・久蔵・一茶の四吟歌仙は、一茶の一座が初折裏の十二句めからであるから、一茶が連衆に加わったのは十二日以降であろう。）

23　一峨の「白露を見てる人のうしろかな」を立句とする両吟歌仙成就。

24　一瓢の「つゝかけた柚のぷんといふ夜寒哉」を立句とする一瓢・也草・成美・久蔵・一茶の五吟歌仙成就。
（一茶は裏の十句めに一句のみ、後で一座に加わったものであろう。）

25　「初雁や芒はまねく人は追ふ」（一茶）を立句とした一茶・久蔵・成美・也草・諫圃の五吟歌仙成就。

九月

初旬　松戸・市川方面に赴く。

23　馬橋に赴く。

十月

10　『成美連句録』に「文化八年十一月十日」と記す諫圃の「月ひかり炭団ふむ夜の鴨の声」を立句とした諫圃・成美らとの五吟歌仙はこの日の興行か。

12　馬橋に入り、十八日まで滞在。江戸帰着は下旬であろう。

十一月

2　馬橋に入る。立砂十三回忌にに列席、追懐の文を手向ける（我春集）。以後流山・馬橋・布川を巡る。

19　江戸帰着。

十二月

19　江戸を立って流山に赴き、馬橋を経て布川で越年。

二

さて、『我春集』の序文には次のようにある。

昔〳〵清き泉のむく〳〵と涌出る別荘をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒の廻りに覆におほひを作て、倩年月をへたりける程に、いつしか垣もくち、水もわろくなりて、茨・おどろおのがさま〴〵にしげりあひ、蛭・子子ところ得顔におどりつゝ、つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける。此道こゝろざすも又さの通り、より〳〵魂の璞を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさゞれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さえも喰らはずなりぬべき。されどおのれが水の嗅きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆく〳〵理屈地獄のくるしびまぬがれざらんとす。さるをなげきて、籠山の聖人手かしこく此俳屈をいとなみ、日夜そこにこぞりて、おの〳〵練出せる句〴〵の決断所とす。春の始より入来る人〴〵、相かまへて、其場のがれの正月こと葉など、必のたまふまじきもの也。

文化七年十二月　日

しなのゝ国乞食首領一茶書

自身の俳論というものを残さなかった一茶にとって、その唯一の資料と言ってよかろう。「つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける」までの此喩には、どんなにあがいてみても俳壇の時流に乗ることができないでいる、いわば中央俳壇の部外者としての批判がある。

また、それを受けた「此道こゝろざすも又さの通り」以下は、『生玉万句』の西鶴の序が思い合わされる。西鶴は次のようにいう。

或問、何とて世の風俗しを放れたる俳諧を好るゝや。答曰、世こぞつて濁れり、我ひとり清り。何としてかその汁を啜り、其糟をなめんや。――中略――朝于夕聞うたは耳の底にかびはへて口に苔を生じ、いつきくも老のくりごと益なし。

一茶が、道彦や巣兆などの一流俳人の目にとまり、彼らに近づきえた理由のひとつに、その地方色豊かな俳風があった。化政期から幕末にかけて流行った「田舎趣味」に通うものがあったからである。しかし、一茶のそれは、優雅・高尚の都会趣味をめざし、模倣・習作をくりかえして、その果てあるものだから、江戸人士のそれとは、本来似て非なるものであった。そして、一茶もこのことは十分に承知していたものと思われ、『株番』（文化九）の序文では「されば、我らがたま〳〵練出せる発句といふもの、みづから新らしきとほこれば、人は古しとあざける。ぶたゝびよく〳〵見れば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほと〳〵おのが心にもうんじ果、三日ばかり口を閉れば、是又木偶人のごとくへんてつもなく、よし〳〵汝はなんぢをせよ、我はもとの株番。」と記している。

さて、その一茶が文化八年晩歳に至って、談林俳諧の急先鋒・西鶴にも比すべき発言をしたのはなぜか。前年の五月、抗争中の父の遺産問題が座礁、前々年の「取極一札之事」も反古同然、ついに「古郷やよるもさはるも茨の花」と吐き捨てている。江戸にもどった一茶には、家があるわけでも、妻子があるわけでもない。また、生活の基盤をなすような資産もない。

『我春集』の序文は、そういう窮地に立った一茶が、一世一代の大みえを切って、布川を中心に下総一帯の俳士た

ちの鳩合を図ったものと考えられる。祇兵を催主とした江戸における月並句合も、思うようには運ばなかったし、柏原帰住のめども立たない今、起死回生の思いがあったのだろう。

三

家庭不和の解消と一家の口べらしのために、荒奉公に出された一茶が、「くるしき月日おくるうちに、ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼ」[注1]え、葛飾派に縁を得て素丸の家の小者から執筆役に抜擢され、二六庵を継承して、竹阿ゆかりの西国行脚も体験した。行脚中には、京阪や西国の大宗匠たちとの親交もあった。また、旅の記念集『旅拾遺』（寛政七）、『さらば笠』（寛政一〇）の上梓もあった。

長途行脚を終えて江戸に帰った一茶は成美の知遇を受け、道彦や巣兆などの一流俳人とも親交を結んだ。だが、江戸の俳諧宗匠として門派を張ることはできず、再度両総・安房を巡って、口を糊していかなければならなかったのである。

『諸国正風俳諧士番附』[注2]（勧進元、栗本玉屑）の東西の最上段に名を連ねる十名は次のごとくである。

東の方

江戸護物・同蕉雨・同何丸・仙台日人・甲州漫々・江戸孤山・伊豆一瓢・上州浦人・江戸碓嶺・奥州夢南

西の方

三州卓池・京都雪雄・大阪万和・芸州篤老・桑名杉長・大阪奇淵・京都十丈・三州秋挙・兵庫桐栖・丹波武陵

番附中に「伊豆一瓢」とあるから、これは文化十四年二月（伊豆玉沢・経王山妙法華寺に移住）以降のものと思われる。一茶は、信州に帰住後とはいえ、番附からはずされ、奥州の雄淵・甲州の嵐名らとともに「世話役」として名を連ねているにすぎない。そして、「東の方」の一位、二位をしめる護物や蕉雨は、当時流行の「月並句合」の選者として門派を張っていた人たちである。

「今の俳諧者をみるに真の風雅にあらず。風雅を売るの人なり。予もしばらく其徒を逃るべからず」（『其日ぐさ』）という竹阿の自戒を引くまでもなく、投句料を取り、それによって生活をささえ、また、寄句の数によって俳壇内の位置を競うというのは、「真の風雅」にはほど遠いことである。しかしながら、成美のように確かな生活基盤を持つ者は別として、「耕さずして食い」「商わずして生きる」俳諧師たちにとって、それが唯一の生産手段であった。一茶もまた、生活基盤のない俳諧師の一人として、月並俳諧の興行に手をそめている。

一茶が発行した月並の刷物（『一茶園月並』）で今日知られているものは、上田・向源寺蔵の八種類十一枚にすぎない。[注3] 発行の年代は、所収の一茶自身の句から、文化一・二年のものと推定される。それぞれの末尾には、

五　閑古鳥　短夜　夏木立

六　夕顔　涼ミ　清水

七　蕣　踊　霧

題　月三句吐　朱引の員、大摺にいたし、四方へ呈出。

廿四日迄、御出吟可被下候。入花月次の通り、廿四穴也。

本船町催主　祇兵

（四ノ二）

などとある。「五　閑古鳥　短夜　夏木立」は、次回・五月の懸題である。投句は三句、高点句は大擢にして四方へ送付する、というものである。また、投句の期限「廿四日」の後の「入花」は点料、それが「廿四穴」、すなわち二十四文である。催主の祇兵が宗匠の一茶に出題を乞うて、公募した形になっている。

その投句者を見ると、江戸橋（祇兵）・日本橋（淇竹）・小名木（菜雨）などの江戸在住者はきわめて少なく、ほとんどは金谷・富津・木更津・流山・田川など房総に限られ、しかも、その顔ぶれも限定されている。

四

文化七年五月、父の遺産分割交渉が不本意に終って、失意のまま江戸へ帰った一茶は、翌六月から再び足しげく両総・安房へ赴いている。すなわち、六月十三日江戸を立って流山に入り、十四日は小金原・布施を経て守谷に泊り、十六日からは布川へ足をのばし、二十日再び流山へもどって、二十三日に帰っている。七月は、十一日夜、舟で木更津へ向い、十三日は富津へ足をのばし、八月一日までの間その界隈を巡っている。九月は十六日に流山へ赴いたが、この時は十九日に帰った。十月、九日に馬橋へ赴き、十日布川、十三日田川、十五日佐原、十六日飯田、十九日小南と足をのばし、二十七日にいったん田川へもどり、二十八日以後は布川にあった。それから、十一月一日、流山に一泊、江戸帰着は翌二日であった。また、十二月は、前述のとおり、二十一日に江戸を立ち、流山に二泊、二十三日には守谷の西林寺へ入り、そのまま越年している。

このあわただしい旅の連続は、一つには、「巣なし鳥」一茶が、成美の食客としての、窮屈からの解放を求めてのことと思われる。しかし、一茶にとって最も重要なことは、守谷を拠点にした強力な一茶社中の形成にあったと思われる。

この期に一茶が最も足しげく通ったのは、流山・馬橋・富津であり、ついで田川・小南・飯田などがあげられる。流山（現、千葉県流山市）には、早くから一茶と親交のあった秋元双樹（三左衛門感義）があり、秋元家は白味醂の醸造業である。その俳系は、はっきりしないが、江戸の葛飾派に連なるもののようである。馬橋（現、千葉県松戸市の内）には大川立砂・斗囿の父子があり、立砂は元夢門の大川平右衛門（油商）、栢日庵と号し、一茶にとっては俳系の上からも大先輩に当たる。その子、斗囿（吉右衛門）もよく一茶を遇した。一茶と双樹の親交は、おそらく立砂、斗囿の媒ちによってはじまったものと思われる。富津には名主・織本嘉左衛門の未亡人・花嬌があり、花嬌は一茶が格別に目をかけた門人であった。また、その養嗣子・子盛もよく一茶を遇したし、大乗寺には住職の徳阿がいた。田川には寛政期から親交のあった曇柳斎一白（倉橋左介）があり、彼もまた元夢門である。さらに、同所には同じく元夢門の升入もあった。小南には椿丘庵太筇（恒丸門）、飯田には兄直（恒丸門）があった。

その中で、特に布川を選んだのは、一つには、この時期、西林寺の鶴老と特に昵懇であったことがあげられよう。鶴老（法師義鳳）は、信州飯田の出身だから、同郷の人として特別の親しみがあったのだろう。布川には葛飾派の先輩馬泉（素丸門）があり、その布川移住は寛政の初めと考えられるから、鶴老と一茶の親交はその媒ちによるものであろうか。また、信州飯田出身の桜井蕉雨（士朗門）の媒ちによるものであろうか。

双樹・斗囿は、一茶にとって俳友であるとともに経済的援助者であり、むしろ後者の意味の方が強い。花嬌は故人（文化七年四月没）、太筇や兄直は同等以上の俳友である。こう見てくると、新たに社中を形成し、門派を張るのに都合のよい条件を有するのは、守谷ということにある。

五

さて、「より〳〵魂の皸を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさゞれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さへも喰はずなりぬべき。」という一茶の主張は、具体的にはどのような句風として示されたか。

着到帳第一番
我春も上々吉ぞ梅の花

『七番日記』文化八年正月の条には、中七を「上々吉よ」の形で、第一行めに記してある。「上々吉」は、役者評判記などの位付けに用いられた語で、それは最上位を示すが、ここでは、非の打ちどころがないほど上等、の意である。下総守谷の西林寺を拠点に、新たなる門派を結集しようとする一茶の意気を読み取ることができよう。前書に、「着到帳第一番」とあるように、それはまた、新たなる出発を祝うとともに、みずから「つとめて心の古みを汲みほさ」んとするものである。確かに、「梅の花」という季語の持つ趣味と一句全体の雰囲気は、そのすがすがしい気分によってよく統一されている。だが、それによって、新たなる出発に際しての心意気を詠もうとするのは、伝統文芸の世界に従ったものではない。

正月二十九日、本行寺における句会には、

黒土や草履のうらも梅の花

春雨や貧乏樽の梅の花
畠打や手洟をねぢる梅の花

というような作品がある。三句めの「畠打や」は、芭蕉の「手鼻かむ音さへ梅のさかり哉」（卯辰集）が念頭にあったものだろうが、数多い芭蕉の梅の句の中からこのような句を思い付いたのは、やはり独自の新しみをねらっていたからであろう。「黒土や」の句、「春雨や」の句ともにその取り合わせには、

釣のいとも香に匂ひけり梅の花　士朗（枇杷園句集）
散うめはみな墨染の匂ひかな　同
梅散るやなにはの夜の道具市　巣兆（曽波可理）
さくと見てふた夜遇しぬ風の梅　成美（成美家集）
うめが香を袂に入れてそう寝かな　同

など、同時代の作品に比すべくもなく、一茶独自の世界である。そこには、都会人の風流とは無縁な生活実感がある。

『七番日記』の正月の条には、

三方の銭五六文んめの花
鶯や古く仕へし梅の花

あさら井や猫と杓子と梅の花
獅子舞や大口明て梅の花

というような句も見える。「鶯や」の句、「あさら井や」の句には、「彼腐れ俳諧」に対する批判がある。

うぐひすの魂も奪ふか梅と月　暁台（暁台句集）
鶯をもどすな梅に垣ねして　士朗（枇杷園句集）
うぐひすとけふも遊びぬ梅の花　卓池（発句題叢）
鶯の宿の多さよ梅の花　詠帰（発句題叢）
鶯も小首ひねるや梅の花　諷竹（発句題叢）

また、右のごとき、観念的通俗的な句風に対する批判である。

『我春集』には、

片かげや這入ば直に梅の花　鶴老
鶯にすゝめられたる草履哉　月船
鍬の柄に鶯なくや小梅村　一茶
梅の花雀がつんで仕舞けり　一茶

もある。鶴老・月船の句は、両者に対する挨拶の意もあっての入集であろうが、それでも卓池や詠帰などの句にくらべれば実感がある。一茶の句の「鍬の柄に来て鳴く鶯」「雀につんで仕舞われた梅の花」は、その発想や用語、季語の働きなどをみれば、これもやはり、都会の風流人士の世界ではない。

けろりんくわんとして雁と柳哉
春雨に大欠(あく)ビスル美人哉
ゆさ〳〵と春が行ぞよ野べの草
下〳〵に生れて桜〳〵哉
がり〳〵と竹かぢ(じ)りけりきり〴〵す
切株にすり鉢きせて閑古鳥
のつきつてさみだるゝ也二番原
夕暮の腮(あご)につゝ張る扇哉
さば〳〵と夕顔の夜もなくなりぬ
蟀(こほろぎ)にふみつぶされし庇(ひさし)哉
名月や女だてらの頬かぶり
秋風や壁のヘマムシヨ入道
名月や藪蚊だらけの角田川
木がらしにしく〳〵腹のぐあひ哉
あら寒し〳〵といふも栄耀かな

いずれも、一茶調と評してよかろう。その俳諧性は俚俗的俳諧と称すべきもので、その発想や用語において、季語の働かせ方において、蕉風正調の伝統的句風にはほど遠いものばかりである。

このような句風は、必ずしも『我春集』の特長ではなく、初期の作品から一貫してみられるものであり、また天明・寛政期における葛飾派の人々にも、このような傾向の作品は少なくない。たが、一茶はそれに満足せず、都会的な、洗煉された句風をめざした習作時代のあったことも事実である。それが、俳諧師として身を立てていく道でもあった。一例をあげてみる。

燃え立ちて貌（かほ）はづかしき蚊やり哉　蕪村（安永九、連句会草稿）

蚊を焼くや紙燭にうつる妹が貝（かほ）　一茶（寛政句帳）

というようなものがある。それが『我春集』では、

春雨に大欠ビスル美人哉

と積極的に詠もうとするのである。

月花や四十九年のむだ歩き

花の月のとちんぷんかんのうき世哉

花守りや夜は汝が八重桜

あれこれと模索の果てに、自身の俳諧に生きるよりほかはないと気付いた一茶の自嘲と悔恨である。

「月花や四十九年のむだ歩き」は、耕さずして食う百姓弥太郎の自戒と限定することはむずかしい。「月花」すなわち、伝統俳諧の世界、都会人士がもてあそぶ風月花鳥の世界を追い続けて三十余年、自身の現実を直視した一茶の感慨と見るべきであろう。また、「花の月のとちんぷんかんのうき世哉」には、『我春集』の序で、「おのれが水の臭きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆく〳〵理屈地獄のくるしびまぬかれざらんとす。」という一茶の主張がある。もの知り顔に言いまわした理屈の俳諧を、「ちんぷんかん」という独得の用語によって、批判したものと見てよかろう。「花守りや」の句は、昼の間は世の風流士たちに独占された八重桜だが、人影のなくなった夜は、花守りよ、お前自身の八重桜というべきだ、の意である。この句の「花守り」を一茶自身、「夜」を下総守谷、「八重桜」を俳諧と見るのは曲解であろうか。

注

1　『文政句帳』文政六年一月の条。
2　勝峯晋風『一茶新集』口絵。
3　『一茶全集』第七巻、三六一P。
4　大場俊助『一茶の愛と死』一〜一〇八P。